

成平 一平太

人口細胞の移植によって人の命が助かる世の中が直ぐ目の前にこようとしているのかもしれない。しかし、脳死という概念に基づき、生きている臓器を取り出して病んだ臓器と取り替える医療の進化も著しい。

心臓が動いていれば生きていくというのは人間の持つ感覚的なものでしかない。法律的には心臓が動いているか否かよりも脳の状態によって判定が下り、死と認定される。

深昏睡状態であり、瞳孔の散大が四ミリ以上で固定化している。さらに、脳幹反射が消失し脳波が平坦かつ自発呼吸が停止となっている。これらが六時間以上経過の後も変化が認められなければ二人の医師によって死の判定が下される。僅かに二十数年前に出来た法律によって心臓が動いても死亡と判定してもよいとされた。いや、出来るようになったと言った方が正しいのかもしれない。倫理とか道徳的などという概念さえなければ一歩先の医学を研究

している学者医師のだけれど口にこそ出さないまでも秘めている。望みの消えた患者の臓器を少しでも新鮮なうちに取り出すためにはそんな基準ではまどろっこしいと。

脳死判定を待つこと無く、たとえ実験の域であつてさえも病に苦しむ他の患者の躰に移植したいと考えるのは悪魔の領域なのだろうか？

学者医師ではなくても人によって生死の境の線引きは異なっている。

心臓が止まった時。脳が死んだ時。目を開けることなく管につながれベッドに横たわった時。車椅子さえも叶わず二度とベッドから起き上がることが出来なくなつた時。意思の疎通さえもままならぬなつた時。痴呆症により家族さえも判らなくなつた時。下の世話を掛けるようになった時。

人によって様々な理由でこれまでとはまったく違う自分になってしまった時。私の人生は終わったとばかりに、死んでしまったも同じと考える人は数え切れないほどに多いと思う。いや、そう考えられる人はまだ幸せな部類なのかも知れない。どんなに自由であろうと頑張つて生きようとしている人が存在することも事実であろう。明日にでも画期的な医学

の進歩により一縷の望みが開けることもあるかもしれない。しかし、生産性を伴わなくなった時に死にたいと考える人は多い。だが、そう考えられるのは自分が元気に活躍出来ている時であり、ベッドに横たわる自分を想像しての死である。元氣な内に、「こうなつたときには死として考えて貰つてもよい。苦痛を伴わない医学的な死を選択する」と公的な書類に書き留めておきたいとさえ思う人もまた多いと思う。もちろん、今の日本では安樂死は認められてはいない。従つて、何等の効力もない文書は単なる落書きに等しい。

一方で、より新鮮な心臓、肺、肝臓、脾臓、腎臓、小腸、眼球（角膜）があれば多くの患者を救ふことが出来ると考える医師は多い。これらの臓器提供者の数より遙かに多くの患者が移植を待ちわびているのもまた事実だ。我が国では一年に数件ほどこしか移植手術はおこなわれていない。有能な医師を育て多くの患者を救うにはより多くの健康な臓器が必要となる。

しかし、移植に用いる臓器が老化しては使えない物にならない。心臓であれば五十歳、肺や肝臓・腎臓であれば七十歳。脾臓や小腸であれば六十歳まで

ならと推奨されてはいる。が、実年齢よりも若い臓器があつても何ら不思議ではない。推奨年齢以下で取り出すことが出来た内臓は、将来のある若者への提供を優先し、たとえ提供者が八十歳を超えていても、まだ元気に活躍したいと望む同年代の高齢者へ移植することで活力が取り戻せるのならばたとえ僅かな存命年数であつても数をこなすことで若い医師の技術が向上することに繋がる。それだけでも意義があると岡平登一郎は考えていた。

「岡平教授、再来週の水曜日に予定している脾臓移植のドナーの目処はどうなりました？」

益田剛史の顔が興奮気味にみえる。半年ぶりに行われる臓器移植の現場に立ち会える喜びは彼にとつて大きなものである。野心家でもある益田剛史は、岡平班きつての有望株であり准教授の地位にあつた。

「何も問題はない。予定通りだ。君には第一助手を務めて貰うからしつかり頼むよ益田くん」

T大医学部の岡平登一郎教授は併設されているT大大学院の第一外科部長を務め、移植手術の第一人者としてマスコミにも登場する人物である。次のT

大学病院々長としてだれもが認めているほどの実力者でもあった。

「レシピエントの芳元大輔よしもとたいすけの方は検査も終り、全てが順調です。七十二歳にもかかわらず生への執着も強く感じられます。もう一度、仕事に復帰し日本中を駆け回りたいと言っています」

「まあ、その道の第一人者として長く君臨してきた人だ。まだまだやり足らないことがあるのだろう」

芳元大輔は、ジャーナリストとしてテレビで顔を見ない週はないほどに活躍していた。もともと、糖尿病を患いながらの報道人生を十年ほど送り、三ヶ月前からT大学病院の特別室の患者となっていた。インスリン依存性糖尿病で膵臓移植の適応基準を満たし、適応評議委員会で適応ありと認められていた。T大学病院への入院はドナーが現れるのを待ったため入院だった。もともと年齢的に七十歳を超えており、数少ない臓器提供者の膵臓はより若い患者が優先され芳元大輔が移植手術を受けられる可能性は必ずしも高いものではなかった。

「大丈夫ですよ。私に任せてください。若くてより新鮮な膵臓をとはいきませんがジャーナリストとして十分に今後の活躍が出来るようになることを保証

しますよ」

著名なジャーナリストとしてのコネを使えば移植手術の第一人者の岡平登一郎教授の診察を受けることなど容易いものだった。

T大学病院の放射線科医からの画像診断に目をやりながら移植手術の第一人者、岡平教授と特別室のベッドに横たわる著名なジャーナリスト、芳元大輔とのやりとりが行われたのは僅かに十日ほど前のことである。

「宜しくお願いします」

芳元大輔は深々と頭を下げ、菓子折と分厚い封筒が入った紙袋を差し出した。

「太一たいち。どうだ、元気にやっているか？」

紙袋を手に提げた岡平登一郎は、部屋に戻ると同時に受話器を上げた。

「登一郎か、相変わらずさ」

「そうか。どうだ、今夜にでも会えないか？」

「ああ、志崎庵しざきあんに電話を入れておく。八時でいいか？」

「わかった。じゃあ、今夜」

志賀先太一と岡平登一郎はT大医学部の同期だった。共に首席を争う良きライバルでもあった。岡平登一郎は、卒業と同時に附属の大学病院の医局へと

進み、志賀先太一は父親が経営する療養型の病院の研修医として跡取りとなるべく道に進んだ。院長であった父親が他界した。今は箱根の入口、入生田いりせんだに四百ほどの病床を抱える大岳病院おおたけの院長に納つていた。

志崎庵しざきいおりは、箱根の強羅に建つ老舗の高級料理旅館だった。客の多くは関東圏からやってくる。温泉を目当ての泊まり客もいないではなかったが、木々に囲まれ独特の雰囲気を出す豪華さは接待にはうってつけと大企業や政治家の多くが顔を見せていた。そして、客の多くは板長が腕を振る豪華な料理に舌鼓を打ち、迎への黒塗りの車の後部座席へと消えた。走り去る車を見送る幾つもの影が深々と腰を折るのもいつもの光景だった。

「女将。悪いね、急で」

「いいえ。こちらこそ、院長先生にはいつもごひいき戴きありがとうございます。睡蓮すいれんの間をご用意させていただきました」

「そう、申し訳ない。連れがもうすぐ来ると思うが少し込み入った話になると思うで宜しく頼む」

「承知しました」

女将は志賀先太一を睡蓮の間に通すと深々と頭を

畳みに付けんがばかりに腰を折り部屋を出て行った。「忙しいのに申し訳ない」

志賀先太一がオシボリを脇に置くと同時に岡平登一郎が志崎庵の女中の案内で睡蓮の間へと入つてきた。

二人は、互いの多忙について睡蓮の間から広縁を通して見えるライトアップされた築山に感心しながら話すことで料理が運ばれて来る迄の時間を潰した。「それではごゆっくり」

テーブルの上には、彩とりどりの料理が並べられていた。

「どうだ、病院経営のほうは？」

「相変わらずだ。何のための医大だったか未だにわからん。がしかし、儲かつてはいる」

「それは上場だ。親父さんの時よりも倍のベッド数になったのだろう」

「それでも入院待ちの患者を抱えている。金銭的になんとかなるのなら自宅介護は避けたいと思うのが自然の成り行きなのかもしれない」

「当然だ。自宅介護は、誰が犠牲になるかの選択でもある」

二人が会うといつも同じ台詞から始まる。

志賀先太一もいずれば親の跡をとの覚悟は出来てはいたが岡平登一郎のように医局に残り医療の最先端を目指した研究をしたいと医学生の方は考えなくも無かった。しかし、父親の足跡を無にするほどの冷淡さは持ち合わせてはいなかった。療養型の病院にやってくる患者に語りかけながら、臓器移植の第一人者としてもはやされる岡平登一郎を羨ましく思っていた。いや、出来れば岡平の目指す最先端の移植手術に何らかの形で関わりたいと今でも考えていた。

「それで、今日は？」

志賀先太一には岡平登一郎が電話を掛けてきた理由がわかってきた。

「実は、臍臓移植を必用とするレシピエントがおれを頼ってきてな」

「臍臓か……。でも大岳には若い患者はいない。レシピエントは何歳だ」

「七十二だ」

「じゃあ、傷んでさえないなければ五年はかたいな」

大岳病院のベッドに横たわる患者は若くても七十歳をとうに超えている。平均年齢でいえば八十七・八と言ったところだった。その多くは脳梗塞を始め

とした脳の損傷により寝たきりとなった患者である。

寝たきりになることで筋肉が痩せ、気力が衰え痴呆が追い打ちを掛ける。誰一人として介護無しでは食事はおろか下の世話を受けなければ明日を迎えることなど出来ない。気分転換にと車椅子に乗せられ散歩と称して中庭で日光を浴びることが出来る患者もいるが極少数でしかない。日々の時間を刻むかのようには決められた時刻になれば食事が運ばれ、看護師や介護士が言葉を掛けながらスプーンで一口ずつ口へと運ぶ。口を大きく開ける患者などはいない。論されるかのように促されやつの思いで僅かに口を開ける患者ばかりだ。しかし、これらの患者は大岳病院では幸せな部類にはいる。四百近い患者の八割はこれさえままならない。食事と称して鼻から管を入れ、食道へと輸液を流し込む。

『人は誰でも神によって生かされている』否定はしないが現実的には『手術によって生きながらえさせられている』

手術の進歩を否定するどころか何処までも追求することこそが医者の特命だと岡平登一郎も志賀先太一も考えていた。がしかし、それは命さえ繋いでいればいいというものでもない。何だつて良い、自分

自身が喜び、それを分かち合える誰かがいてこそである。見知らぬ相手であつてもいい何かの役に立っていると感じられればいい。そんな生産性を伴っている命こそが生きていることだ。歩けなくてもいい。ベッドに寝たきりでもいい。それでもこうした生産性をともなうことで人は自分自身に価値を生み出している。

大岳病院のベッドには、他人の手とはいえスプーンで食事を取っている患者以外にはおそらくはこうした生産性は見られない。いや、スプーンで食事を運ばれている患者であつてもそうなのかもしれない。たとえ寝たきりであつても。意思の疎通が出来なくても家族の願いとして一日でも、いや一時間でも長く生きて欲しいと願われている患者も多い。それだつて立派な生産性である。しかし、その生産性に患者自身の喜びはあるだろうか……。批判を覚悟で言うならば、身内のエゴによつて生かされている患者が気の毒であり一定の条件さえ満たされれば安楽死こそが患者自身の喜びに繋がると岡平登一郎も志賀先太一も考えていた。

病院のベッドで死を待つのみ患者にも医療という名の税金が投入される。患者自身に金を産む力な

どは皆無であり納める税金などは無い。年金という名の収入はあつても、それにも税金が投入されている。株式や著作権などによつて収入が得られる患者もいるかもしれない。しかし、それは遺産という形で誰かに継がれるので患者自身が生きていなければならぬ理由はない。安楽死によつて患者に投入される税は不要となり、患者が本来納めるべき税は受け継いだ者が納めることとなる。

「太一、移植によつて蘇る患者は再び世に出て社会で活躍することが出来る。言い方を変えれば、ベッドに寝て税金を使う側から税金を納める側が変わる。患者自身を蘇らせることで国が蘇る。おれはそう思つて移植医療の発展に尽力したいのだ」

少し、酒が回り始めたのか岡平登一郎が饒舌になり始めている。さらに酒が進めば札幌医大の心臓移植の権威であつた和田教授の話が始まる。

「登一郎、酔う前にレシピエントの検査結果を見せろ。俺の方で適合すべく臍臓を探す。親族の説得もおれに任せろ。但し、摘出は俺にやらせてくれ。こんなことでもなければおれがメスを握る機会はやつてこない。それと、移植手術におれを立ち合わせろ。」

第三助手でも第四助手でもかまわん」

志賀先太一も少し酔いが回り始めている。岡平登一郎が差し出した大封筒には、芳元大輔の移植手術に先だつての様々な検査結果が書かれた分厚い診断書が入っていた。志賀先太一の診断書をめくる手がおぼつかない。

翌朝、志賀先太一はいつもより一時間以上も早く病院に出勤すると同時に院長室に駆け込んだ。直ぐさまパソコンを開き、全入院患者のカルテに順次目を通し始めた。

大岳病院には四百床のベッドがほぼ全て埋まっている。今、空いているのは一昨日もしくは昨日において他界した患者が横たわっていたベッドだ。毎日のように一人か二人の患者が霊安室の扉を経て霊柩車で退院をしていく。空になったベッドは、直ぐさま営繕係の手によって清掃及び消毒されて病室に戻される。介護士の手によって次の患者を受け入れるためのベッドメイキングが施される。こうした動きと同時進行で、空きベッド待ちの患者の家族のもとに連絡が入れられ、入院可否の最終確認が取られる。大岳病院ではベッドが三日として空くことはない。地元である箱根、小田原、南足柄はもとより相模地区全域からの入院患者を受け入れている。いや、手

厚い看護と昭和四十年から続く療養型病院としての歴史が関東圏からも『空きが出たら是非とも』と順番を待つ患者がいる。

長い歴史によるカルテの積み上げと志賀先太一の持つ医師としての眼力から、患者の余命がおおよそであつても読み取れていた。

志賀先太一は、入院患者の中から、レシピエントの検査結果とにらみ合わせながら十人の患者の採血を行った。いずれも八十歳をとうに超えている。ドナーとして臓器提供を許されていないわけではないが年齢的にもはや使えるとは思われていない年齢で有る。だが、岡平登一郎はそうは考えていなかった。若いレシピエントであれば十年、二十年、いやそれ以上の活躍の出来る時間を与えることが出来てこそ移植手術である。しかし、レシピエントが七十歳を超えていた場合はどうだろう。如何に寿命が延びたとはいえ七十歳は峠の年齢で有る。男性の健康寿命の平均は七十三歳といったところだ。女性であっても七十五歳がとこだ。この年齢に到達すれば、先ずは満足せざるを得ない。今、目の前にいるレシピエントの芳元大輔は七十二歳だ。岡平登一郎は元気に五年働く臍臓であればドナーが何歳で有ろうと問

題はないと考えていた。

「登一郎、H^白L^{血球}A^{型の}タイプ^{適合}検査に使う採血管十人分を夕方までには届けるから結果が出しだいに連絡をくれ、じゃな」

志賀先太一の口調はすでに臍臓移植手術チームの一員でも有るかのように感情のないものになっていた。

「院長、午後の一時半に西病棟の三〇七号室の米沢^{よねざわ}章吾^{しょうご}さんのご家族、三時に中病棟二三八病棟の倉持多貴子^{くらもちたかこ}さんのご家族がおみえになります」

岡平登一郎からの連絡でレシピエントと白血球の型が適合するドナーとして二本の採血管の番号が知らされてきた。志賀先太一は、直ぐに看護部長に命じて二人の患者の家族に連絡を入れるように指示を出していた。

「お待ちしていました。今日はお忙しいところをわざわざお呼び出して申し訳ありません」

志賀先太一は病院長としての風格を意識的に醸し出しながらも柔らかく丁寧な口調で患者、米沢章吾の長男夫婦を院長室に招き入れ、ソファーに座るよと促した。

「とんでもありません。こちらこそ、いつもお世話

になるばかりです……」

長男の米沢伸吾^{よねざわしんご}と妻のさと子が恐縮そうに頭を下げながらソファーに腰を降ろした。

「どうですか、お仕事の方は？ 確か、プレス工場を経営されていると聞いておりますが……」

「はい、小さな町工場で従業員もいません。夫婦二人で朝から晩まで働いてやつの日々です」

米沢プレスはベッドで寝ている米沢章吾がバブル景気に乗って始めた町工場だった。大手の自動車部品メーカーの孫請けではあったが、数人の従業員を雇い入れ羽振りの良い時代もあったがこの十五年は厳しい決算を余儀なく強いられていた。そんな矢先に社長の米沢章吾が脑梗塞で倒れ、看病に入った母の智恵子が一年後に急な病で他界していた。やむなく、妻のさと子がその代わりにと看病をしながら社長となった夫の伸吾を助けて工場に入った。先行きの無い工場を継ぐことは無いと伸吾に諭され、子供達は独立した生計を立てていた。仕事場と舅の介護に疲れ果てたさと子を見かねた伸吾は、六年に及んだ自宅介護から大岳病院へと父親を入院させた。病院に払い込む毎月の費用十五万円余が重くのしかかっってはくるものの精神的、肉体的な苦痛からは解放

される。

「ご苦労が多い分、きつとお父様は喜んでおられますよ」

「そうでしょうか？　そうだと良いのですが……。来月の半ばで丁度五年になります」

「長いですね……五年は……。実は、ご主人。この病院の院長として長年患者を看んでいますと寿命が尽きる日が近づいているのが何となく分かるようになります」

院長として患者の家族に引導を渡さなければならぬ。それもドナーとして臓器の提供をも承諾させねばならない。たとえ微塵ではあつても家族を動揺させるわけには行かない。ましてや何らの疑念をも抱かせてはならない。全てが水の泡となってしまう。志賀先太一は言葉を選びながら慎重に話を進めた。

「院長先生……」

伸吾はそう言うとき次の言葉を呑み込み妻のさと子と視線を交わし、改めて次の言葉を待った。

「お父様はこの先、長くて数週間、おそらくは一週間ほどかと……」

「そうですか……」

伸吾はか細い声を呟くかのように口にするとうな

だれ、さと子の右手甲に手を置いた。心なしか肩が震えているようにも見える。志賀先太一には伸吾が流す涙が哀しみの涙なのか、苦しみから解放される安堵の涙なのかは計れなかった。

「米沢さん、お父様は脳梗塞がもとで長く床に伏せていらつしやいました。躰が不自由になり、言葉さえもままならない日々が続き、痴呆を始めとする老人特有の様々な症状が追い打ちを掛け、医師との会話もままならなく輸液による栄養補給の日々でした。ご本人も口には出せなくても苦しかったかと想像さえてきます。ここでは機械的な延命処置は施していません。それでも、躰を維持するためのあらゆる手助けをしてきました。しかし、命はいつか尽きるものです。私でもいつかはその時がきます。ただ、出来ることならば家族に迷惑を掛けないように長く患うことなく、だれもが願ってやみません……」

志賀先太一は淡々と僧侶が信徒に話しかけるかのように口にすると一息を入れた。

「先生の言われるように父も脳梗塞で倒れた直後は『迷惑を掛けてすまない。出来ればこのまま一日も早くお迎えがくればと願うばかりだ』と、たどたどしい言葉を涙ながらに口にしておりました」

うつむき加減の伸吾の目から大粒の涙が落ちた。

「そうですね……米沢さん、お父様が存命なうちから不謹慎かとは思いますが、お父様亡き後の葬儀はどのように……」

「……わたしどもは親戚も少なく、小さく家族だけで見送ってやろうかと思えます。でも何故？」

伸吾は院長の志賀先太一から父親の余命が僅かだと聞かされたと同時に葬儀に掛かる費用が脳裏をよぎっていた。

「米沢さん、どうでしょう。家族葬儀の費用とお寺様へのお布施。何かと物入りとなることでしょう」

「……」

「実は、お父様の年齢であっても臓器移植が可能なお場合があります。もちろん、若い人には無理ですが移植を必用とする相手も高齢な人ならその可能性があります。お父様の血液検査などを見る限り、心臓、肝臓、腎臓には衰えが看られますが脾臓については……」

「父の脾臓を誰かに提供するということですか？」

「そうですね。もちろん、生きている内に摘出するのではなく脳死と判定された時点でのことではありません」

「ちよつと待って下さい。先生のお話を聞いていると、余命もない父の脾臓を売らないかと言っているように聞こえますが？」

「ご自分を害されたのなら謝ります。今、脾臓を必用としている患者がいる。お父様とその患者の白血球の型が一致し、適合と判断されています。出来ることならばとこうしてお話しさせていただいております」

「先生。正直な処、私も家内もホットしています。入院費は私どもにとつて重荷でした。これで肩の荷が下ろせると。だからといって……。父の顔を見て帰ります」

米沢夫婦は丁寧に一礼をしているものの明らかに憤慨しているとばかりに腰を上げて部屋を出て行った。

いくら丁寧な言葉を選んでもいきなり臓器を提供して欲しいと言われれば二つ返事とはいかない。ましてや葬儀費用の話を出したのは失敗だったとばかりに志賀先太一は大きくため息をついて窓の外に目を落とした。そして、三時に来ることになっている倉持多貴子の家族が院長室のドアを開けて入ってくるのを待った。

「院長先生、お話しは良くわかりました。私と母は二人だけで長いこと生活をしてきました。幸いなことにこの入院費は母の年金で充分賄うことができました。四年七ヶ月の苦しい入院の上に臓器を取られるのは余りにも母が可哀想だと思います。生前にドナーとなるような話も聞いていません。母が亡き後は息子夫婦の住む関西へと移り住むことにもなっています。お相手の方には大変申し訳ないのですが……」

十本の採血管を岡平登一郎に渡してHLAタイピングの結果、二人しか適合と判定を受けた患者はいなかった。その二人の家族に臓器の提供を断わられてしまった。大岳病院のベッドにはレシピエントと同じ血液型の八十歳代の患者はまだ多くいる。しかし、志賀先太一が採血をしたのは、長くてもこの半月前後には他界するであろうと思われる患者から選ばれた。

「HLAタイピングの対象者をひと月に広げてみるか……」

志賀先太一の心に医学界のためならばと邪悪な思いが湧き始めていた。いや、そもそも大岳病院のベッドに横たわっている患者の平均年齢は九十歳に近

い。年老いた患者の臓器を取りだしてT大病院まで届けるために要する時間は臓器の劣化に直結する。先ずは、患者をT大病院に転院させ脳死の判定を必要とするその時まで療養を続けることになる。脳死の判定は二人の医師によって行わなければならないと臓器移植法によって定められている。しかも六時間の間隔をもつての二度の判定によって変化が認められないことが絶対的な定めである。しかし、このチームに関わる岡平登一郎と志賀先太一がその判定医師として名を連ねることになっているが、後々において問題の火種となりうる。そうならないためにはチームの結束と情報の漏洩を防ぐことは絶対的な条件ともなっていた。

本来、有効とされている年齢よりも十年以上も年老いたドナーからの臓器である。より安全に。より新鮮な臓器を取り出し、レシピエントに移植するには一分をも大事に扱わなければならない。輸液によって生かされ、意思の疎通さえもままならずベッドから起き上がることも出来ない患者。そこに何らかの作為が働かないとは限らない。その作為を証明することなど出来ない。五十年前の出来事だった札幌医大の和田教授による移植も事件として世間を賑

わせたものの最終判決は不起訴となった。しかし、疑念は多くても医学界における多くの事柄に貢献したのも事実である。

患者が、安楽死を願っていたと聞けば志賀先太一にとつて重い石を一つ取り除いたかのように肩に掛かる負荷が軽くなる。僅かに五、六年であつてもレシピエントが再び社会で活躍している姿。そんな姿を、テレビで観られるようになれば岡平登一郎にとつて『振り向くな、真っ直ぐに前だけ向いて歩めば良い』と、自分に言い聞かせることができる。安楽死が認められるようになれば、ドナーの年齢もレシピエントの年齢も躊躇しなくても良くなる。そのための小さな一歩となればとさえ二人は密かに考えていた。

「登一郎、今日持ち込んだ採血管のHLAタイプピングの必要は無くなった。先に適合判定を受けた患者の息子が電話をしてきて臓器の提供を承諾してくれた」

志賀先太一の声が心なしか弾んでいる。想定余命を二週間から一月に伸して採血し、T大学病院へと持ち込んでいた。適合可否の結果は明日の午前中にも判明することになっていた。それに伴つてもう一

度、適合患者の家族と志賀先太一が臓器提供の話をすることになっていた。しかし、今日の昼前になつて米沢伸吾からもう一度、話を聞きたいと電話が掛かつてきたのだった。

「それではもう一度ご説明させていただきます。お父様は明日の朝、T大学病院の方へと転院させていただきます。お見舞いにはいつ来ていただいてもかまいませんがT病院の規則の範囲内となります。脳死の判定は法律によつて二回行われます。危篤状態になつた時点でご連絡させていただきますので場合によつては一回目の脳死判定時に立ち会つていただくことも可能ではありますが厳しいかもしれません。

二回目の脳死判定はその六時間後となります。一時の間前には手術室の方へと運ばれますので五時間以内であればお別れができます。それが、お父様との病院での対面は最後となります。翌日にはご遺体をお返しすることができますので葬儀屋とお寺様のご手配を米沢さまの方にてお願いいたします。尚、今月における入院費用とこの先に掛かる費用についてはこちらで負担させていただきます。その他に特にお渡しする金銭はありません。ご葬儀ともなれば何かと費用の掛かる物です。お気持ちを込めての御霊前

を包ませていたきたいと考えております」

志賀先院長からの丁寧な説明を受けた米沢伸吾は何枚もの書類に署名捺印を済ませると院長室を出て行った。

いくら質素な家族葬とはいえ、葬儀屋へのものもろの費用とお寺様へのお布施を合わせれば百万円近い金を工面しなければならぬ。これまでに病院への支払いが伸吾が受取る国民年金だけでは半分にも満たない。五年の長きにわたって払い続けた入院費は九百万円を超える。生前の伸吾が口にした『迷惑は掛けたくない』という想いが伸吾の迷いを取り除いたに違いない。『伸吾、おれの臍臓を役立たせよ。灰にしてしまつてはだれも喜ばん。おれもその方が気楽だ』伸吾にはそう聞こえたのかもしれない。

「登一郎、ドナーの心臓は年齢的にもそんなに長くは持たない。心臓が停止すれば臓器への血流が止まる。一気に鮮度が落ちる。おれは長いこと患者を看てきた。今すぐ家族に連絡を入れるいいな」

米沢章吾の心臓は弱くてもまだ動いている。瞳孔も開いてはいない。脳波も弱くはあつても反応を止めしている。しかしその全ては明日の朝には止まるだろうと志賀先太一が岡平登一郎に迫つた。

岡平登一郎も目の前の患者は八十五歳という高齢である。第一回目の脳死判定のあと二回目の判定は六時間後となる。脳死の判定後に心臓が止まるまでに数日との例もあるが、目の前のドナーは高齢であつて。その間、心臓が動いている保証の無い事はわかつていた。

「太一、すぐ家族に連絡を」

米沢伸吾夫妻がT大学病院に駆けつけたのは志賀先太一が連絡を入れて二時間ほど後のことだつた。「午後一時二十三分、第一回目の脳死を確認しました」

夫妻が、ドナーの顔を覗き込むと同時に岡平登一郎は静かに告げると頭を垂れた。

ドナーの床頭部に置かれたモニタリングの脳波の波状は赤く一本の線が水平に描かれているだけで止まつている。それでも心拍数を表わす波状は乱れているものの音を立てながら波を打つていた。

「どうなされますか？　ここで今暫く患者さまのおそばについていただくことも可能ですが？」

若い看護師が優しく夫婦に語りかけた。

「ありがとうございます。私達は葬儀の段取りもありますので自宅で父の帰りを待ちます」

「そうですか。それでは明日のお昼ごろにはお父様をお送りさせていただきますので改めて明日の朝お電話させていただきます」

さすがは丁大学病院である。看護師も教育されているのである。目の前の患者はすでに蘇る事はない。しかし、二回目の脳死判定が下るまでは死亡扱いとするわけにはいかない。あくまでも患者であり口が裂けてもご遺体とは口にできない。葬儀屋へ送るとも口にはできない。

伸吾夫妻が病室を出て、丁大学病院の玄関フロアを出たのを確認すると直ぐさまドナーはストレッチャーへと移し替えられ手術室へと運ばれた。

午後七時二十三分を過ぎた時点で志賀先太一が米沢伸吾に二回目の脳死を確認しましたと電話を一本入れれば法的な手順は全て完了する。移植手術における記録の全てを記録係がパソコンに入力することになるが入力された時間が正しいかなど誰もチェックする者はいない。それら全ては執刀医である岡平登一郎の手の中にある。

レシピエントである芳元大輔への臓臓移植手術に要した時間は七時間を超えた。

「如何ですか？ 芳元さんお目覚めは……」

長い眠りから醒めた芳元大輔を岡平登一郎が見舞った。

「少し痛みはありますが暗闇からの生還を果たしたかのようなすがすがしい気分です」

「そうですか。それは良かった。今、麻酔から醒めても鎮痛剤が一時間ぐらいいは利いているでしょうけど耐えられないと思つたらナースコールを。今の所、合併症も見られませんが拒否反応も見られません。このまま行けば三週間もすれば退院出来るでしょう。暫くは自宅療養をしながら二週間おきに来院いただき、二ヶ月後にはテレビでのコメントター復帰も可能かと」

「本当ですか？ ありがとうございます。これも先生のおかげです。またバリバリと仕事ができます」

「せいぜい頑張つて仕事をしていただき沢山稼いで沢山の税金を納めて下さいね」

「税金は相応に……。ところで、先生。私に臓臓を提供してくれたのは……？ お礼を申し上げたいのですが」

「お気持ちにはわかりますが、それは出来ません。ドナーに関する情報は一切をお教え出来ないことになっていのです」

「そのことはじゅうぶんに承知しておりますが……」
「申し訳ありません。そのお気持ちには社会への還元
ということだ」

芳元大輔が脾臓移植を受けて一ヶ月が経った。経過は順調で何らの問題も生じてはいない。

「登一郎。どうだ、今夜当り。箱根に出てこないか？
この間の慰労を兼ねて一杯」

「志崎庵か？ わかった。八時には着けると思う」
「わかった。じゃあ八時に」

志賀先太一は上機嫌だった。移植手術の場合、一ヶ月間を何も無く過ごすことが出来れば少なくとも向こう五年ほどは何らの問題もなく生存出来る。当然のことながらベッドの上でということではない。普通に社会生活が可能だということだ。芳元大輔もジャーナリストとして社会復帰できることは間違いない。多少の無理を承知でドナーを見つけ、臓器の提供を家族に承諾させた志賀先太一にとって待ちに待った一ヶ月だった。

「院長先生、お待ちしておりました。いつもの睡蓮の間をご用意させていただきました」

「ありがとうございます。女将いつもすまないね、急で」

「とんでも有りません。こちらこそごひいきただ

きありがとうございます。ご指名の雛菊ひなぎくと小染こそめ姐あねさんもお呼びしてありますから今日は心ゆくまでお時間をお過ごしくださいませ」

志崎庵には一見の客は来ない。来たくても受け入れてはいない。客が志崎庵を好み、志崎庵が客を選ぶ。少なくとも金を見せびらかすかのような下品な客は志崎庵の暖簾を潜ることなどはできない。それはたとえ大物政治家であろうが著名な企業の役員であろうが同じだった。女将の目に適わないと思われるような人物を連れてくる馴染みの客もいない。志崎庵に出入りが出来るというだけで箔が付くほどに名の通った料理旅館だった。

「失礼します。今日はお招きを戴きありがとうございます」

志賀先太一が睡蓮の間に腰を降ろして十分も待つこと無く岡平登一郎が腰を降ろした。すると、ほぼ同時に睡蓮の間の襖が開けられた。膝を廊下に付け、扇子を仕切り線のごとく畳みに置いて雛菊と小染がにじり入ると丁寧ていねいに腰を折った。

二人とも帳場の隅から、岡平登一郎と志賀先太一が揃うのを見ていたのであろう。間髪をいれることなく笑顔を振りまいた。

「すまないねえ、売れっ子の雛菊姐さんと小染姐さんに前触れも無く声を掛けて」

「とんでもありません。もう少しで二人ともお茶を引くところでした。お声を掛けて頂け、明日の食の心配もなくなりました」

「嬉しいね。二人とも大岳の特別室を何時でも使えるように配慮するから。『いざ』と言うときには声を掛けてくれ」

「もうしわけありません。謹んでご辞退申し上げます。院長先生の病院にお世話になる前にポックリと逝けるように長野のピンコロ地蔵のお守りを毎日拝んでいきますから」

雛菊も小染も客の素性も性格もじゅうぶんに知り尽くしている。いくら酒の席とはいえ、相手を見ないで何かを口にするのはしない。芸者としてプロであるからこそ志崎庵への出入りも許されていた。「太一、お姐さんの言うとおりで。おれもおまえの病院だけは世話にはなりたくない。その前に安楽を選択するな」

「おいおい、勘弁してくれ。そんな患者ばかりじゃおれは破産してしまう」

志賀先太一が泣きべそを掻きながら頭に手をやる

小芝居が睡蓮の間にここぞとばかりに笑いが広がった。

「ちよつとすまない」

岡平登一郎が背広の内ポケットに手をやり、笑いを中断した相手の名前を確認すると広縁に出て障子を閉めた。

「申し訳ないが、今日はこれで席を外してくれないか？」

岡平登一郎の顔がこれまでの和やかな雰囲気の中で見せていた物とは一変していた。

「すまないね、二人とも。女将には私から話を付けておくから」

ただ事ではないと感じ取った志賀先太一は言葉が続け、懐から財布を出しながら雛菊と小染にわびた。

「大丈夫ですよ。ここは志崎庵、そのようなお心使いは無用に願います。それでは、私達はこれで。またお声が掛かるのを楽しみにしております」

何か人前では話せないことが起きたと忖度した雛菊と小染は笑顔を崩すこと無く睡蓮の間を後にした。

「いいの、いくらかのチップも払わず……」

岡平登一郎は財布に手を掛けたにもかかわらずそのまま懐に収め直した志賀先太一に申し訳なさそう

に口にした。

「いいんだ。おれもついうっかり財布を出してしまつたが野暮な事をして恥を搔いたと反省している」

「恥？」

「ああ、志崎庵は超の付く一流の料理旅館。使用人にも出入りの芸者やタクシーの運転手にさえチップを受取ることを固く禁止している。そんな氣遣いをさせること自体がプロとしての自覚が足りないよ。出入りのものまでにも徹底した教育をしている。その分、使用人の給与も地域一番だし、芸者の花代もそこいらの倍近くはする。だからといって志崎庵は一円たりともピンハネはしない。タクシーの運転手にもだ。そのつど、運転手には女将が心付けを渡し、遠方の客を順番に割り当てるかのように指名をしている。何かがあれば即出入り禁止の運転手としてのレッテルが貼られてしまう。箱根の運転手ならだれもが女将から指名の掛かるのを待っている」

「そいつは凄い。板場も仲居もこの料理屋に関わるだれもがプロ。それを束ねる女将はプロ中のプロとということか……」

「感心するのはそれくらいにして、何があつた？」

志賀先太一は、睡蓮の間に流れる空気を現実へと

引き戻すかのように顔がこわばっていた。

「いま、益田准教授から電話があつて、明日発売される週刊特ダネ報道に『令和版、和田教授臓器移植事件の再発』との大見出しで芳元大輔への脾臓移植が取り上げられていたとの連絡が入つた。臓器移植の権威、某大病院のO教授と歴史のあるO療養型病院の院長による生体実験にも似た脾臓移植が行われたとの記事だ。レシピエントもYとはなつていますが、芳元大輔はジャーナリストとして実名で脾臓移植手術を受けたとマスコミに公表している。明日になれば、おれのところにもおまえのところにもマスコミが押し寄せてくる」

岡平登一郎の顔色が冴えない。いつも胸を張つて堂々としていた男の背中が丸くさえ見える。

「登一郎、何を恐れる。俺たちは何も悪いことをしているわけではない。いつものおまえらしくも無い。逃げることはない。堂々と言ひ返してやれ。八十三歳のドナーの脾臓は芳元大輔の躰を借りて立派に息づいている。一点の曇りも無い、まれに見る成功例だと大見栄を切つてやれ」

確かに今回の移植手術には世間の常識の範囲では考えられないかもしれない。失敗に終つたならば非

難を受けなければならいほどだったのかもしれない。ドナーは八十三歳であった。医学界の常識では七十歳までと推奨されている。がしかし、推奨であり法的に拘束されてはいない。倫理的にどうかとの意見もあるかもしれないが結果として成功している。いわゆる結果オーライの手術だった。レシピエントの芳元大輔は七十二歳である。将来のある若者が優先されがちなレシピエント優先位はだれもが賛同できるシステムではあるが、移植を希望する高齢者にとっては厳しいものがあることも現実である。高齢者のドナーの臓器は、より若いドナーの臓器に比して寿命としては短いのもかもしれない。しかし、元気な細胞に囲まれることでその寿命を延ばすことはじゆうぶんに考えられる。高齢のレシピエントならばそれほど長い時間では無くてもじゆうぶんに充実した人生をやり直すことができる。芳元大輔にとつて、この上ないほどの充実感を味わって貰うことができるとの信念の結果の移植手術だった。こうした岡平登一郎の思いに賛同した志賀先太一の尽力によるドナーだった。この移植チームに関わっただれもが胸を張った。

「岡平教授。移植に必用な臓器をお金で買ったとい

う噂もありますか？」

「今回の手術で岡平教授自身が高額報酬を得たのではありませんか？」

週刊誌に記事が出たことでT大学としても記者会見を開かないわけには行かなかった。岡平登一郎により移植手術に関わる一連の出来事について丁寧な説明が終ると同時に記者からの厳しい質問を浴びることになった。

「噂の出処が何を根拠としているかはわかりませんがそのような事実はありません。確かに手術に当って多くの金銭が必要となりました。詳細については申し上げられませんが疚しいことは一切ありません。まして私腹を肥やしたなどと言われている法的処置をも視野に入りたいと考えます」

何処までも冷静に前を見据えて岡平登一郎は質問に応えた。

「レシピエントはジャーナリストの芳元大輔氏ですよ。ね。著名でもありお金もある。手術が成功すれば岡平教授の名声も上がる。こんな思いがあつての無理のある高齢のドナーの臓器を実験的に使ったということでは無いと言い切れますか？」

記者の質問は、如何に記事映えのする言語を引き

出すかに価値を見出そうと考える。必然的に棘のある言い方になるのもやむを得ないのかも知れない。「レシピエントの名前もドナーの名前も移植規定によつて明かすことは出来ません。がしかし、私には私なりのこれまで積み上げてきた実績に基づく技術があります。その技術が、ドナーやレシピエントの年齢を考慮しても成功の確率は限りなく高いとの判断によつて行った手術です。これまでの常識だけにとらわれていたらレシピエントは一向に届かない適合臓器を待つだけの人生で幕を閉じることになります。高齢であることを理由に世の中の役に立ちたいとの思いを断念しなければならぬドナーになり得る人もいます。適合と言われる七十歳はあくまでも安全を鑑みた推奨年齢であります。六十歳で足腰がひ弱になり車椅子の生活を余儀なくされる人も居れば、九十歳を超えてもトラックを走る老人もいます。年齢と一般論だけで語れるものでは有りません。経験を基に医師の目で見た結果のドナーでした。やみくもの挑戦ではなく確信に基づいた挑戦だったと自信を持って言い切れます」

岡平登一郎は抑揚を付けながら冷静を装うかのように自信を滲ませながら応えた。もつともその雄弁

な話術を構成するために多少の脚色を必用としたものの、それを指摘出来るほどの知恵も知識もこの会見に集った記者達には持ち合わせていないことを岡平登一郎は見抜いていた。

「岡平教授、今ひとつお聞きしたいのですが二度の脳死判定のあり方に一点の曇りも無いと言い切れますか？ より良い状態の臓器を取り出したいとの思いを優先させたということは有りませんか？」
記者の質問は、臓器移植をするに当たっての確信的ともいえる鋭さを持つていた。

「ご質問の意味がよく分かりませんが、私は医師です。一点の曇りもありません」

岡平登一郎は何処までも冷静を装いながらも胸を張り力を込めた。

「脳死判定から手術が終るまでの記録があると思いますが開示していただくことは可能ですか？」

「それは出来ません。もつともしかるべき所がしかるべき手続きを踏んで来られれば何時でも開示しますが記者の方達がこれを目にすることは出来ません」

二時間を超える記者会見が終った。無事に乗り越えられたとの自負が岡平登一郎にはあった。

「岡平教授、今日の記者会見で全てが終ればいいの

ですが：。遠い過去ではありますが札幌医大の和田教授の件もあります。最終的には不起訴処分は間違いの無いことかとは思いますが、東京地検が動くようなことでもなれば我が大学のイメージに計り知れない傷が付きます。おわかりですね？」

岡平登一郎は記者会見の後、学長に呼ばれた。学長には大学の名誉を守る責務がある。今回の膵臓移植についてこれ以上の騒ぎともなればここには居られなくなることを覚悟しろと言い渡されたも同じだった。

膵臓移植における疑惑第二弾として週刊特ダネ報道に再び岡平登一郎の顔写真がT大病院をバックに大きく載った。サブタイトルにO療養型病院院長が移植チームに大きく貢献とある。記事には、院長と岡平教授はT大学の同期で首席の座を争った仲とも書かれてあった。岡平教授から依頼を請けた院長が四百人の入院患者からレシピエントと適合する患者を選び出したとある。さらに、脳死判定にも関わったとあり、決めつけてはいないものの巧みに疑惑へと導く記事の内容だった。

「私どもは院長先生に感謝しております。正直なところ父の長い入院生活は経済的に大きな負担となっ

ておりました。院長先生から後、一週間ほどの余命と聞いて安堵もしました。これで少しは楽になると家内とも話しました。膵臓の提供については一度は断りましたが、自宅に飾ってある父の写真に相談しました。父がそうしてくれと私に微笑んだ気がしました。私は膵臓を売ったなどという思いがありません。確かに父が亡くなった月の病院の支払いは不要だとは言われました。それが対価だと言われればそうかもしれません：。それと香典を戴きました。世間の噂に上っている数百万なんて金額ではありません。院長先生と執刀医の先生とT大学医学部からそしてレシピエントの方からのご香典を頂きました。それだけです」

膵臓提供者の家族Yとなっていた。

何処でどう調べたのかさすがは週刊誌の記者だけのことはある。しかしこの記事からは衝撃的なタイトルとは裏腹に疑惑を色濃くする物とはなっていない。しかし、想像しただけではレシピエントと適合するドナーを学友の院長が四百人の入院患者の中から選び出し、脳死扱いにして移植手術をしたかのように読み取れる。つまりは患者を移植実験のために殺害したとも取られかねない。遺体を自宅へと

搬送する際に四名分の香典を託したのも幸いしている。まとまった金額を一つの封筒では、あからさまに対価と言わんばかりである。実際には四つに分けた香典の総額は百万円だった。それも遺族である伸吾に直接の手渡しだった。免除とした入院費は十万円がとこである。本人が口にしない限り金額について誰も知ることはできない。代表で葬儀に参列した志賀先太一の話では寺への布施を合わせても百万円でお釣りが来たであろうほどに質素な見送りだったとのことだ。

T大学々長の懸念していたとおり東京地検が臍臓移植に関わる疑惑の解明に乗り出してきた。左派系の市民団体が刑事告発をしたのだった。確かな証拠もなくただ疑わしいとのことだけで地検が取り上げるとも思われなかったが、週刊誌の印象操作により世間的には余りにも大きな疑惑として定着ともなれば動かないわけにはいかない。令状を元に、教授室はもとより研究室や大岳病院、さらには教授宅や大岳病院々長宅まで家宅捜索が実施された。当然のごとく関係記録の押収もされた。聞き込みにおいては、T大学を始め大学病院、大岳病院の職員にまで広げられた。さらには、志崎庵の女将や、ひいきの芸

者として雛菊や小染までもが聞き込みの対象となった。レシピエントの芳元大輔にも刑事が訪れはしたが、もともとレシピエントは何も聞かされてはいない。ただ、請求された金額を支払うだけである。表に出る金額であり、お礼と称し菓子折と共に差し出す金銭についてはだれもが口にすることはない。この金が香典とドナーの入院費として使われたことは事後ではあっても芳元大輔に報告はしており、警察の問いに矛盾無く応えることが出来た。

多少厄介なことは、他の移植経験のある教授や医師の意見には岡平登一郎の考えと異なる考えが多く述べられたことだった。当然といえば当然、人が違えば考え方も違う。だからといって何らの決めつけには至らない。疑いは疑いのままであり、和田教授と同様に岡平登一郎も移植から一年の時を経て不起訴処分となった。

「久し振りだな、登一郎。S医大教授の椅子はどうだ、慣れたか？」

岡平登一郎は東京地検の捜査が入ったことでT大学と姉妹校の提携をしている東北のS医大の教授に転任させられていた。そろそろ半年になる。久し振りに東京の自宅に戻ってきた機会を利用して志崎庵

で二人は呑むことになった。

「面白くもおかしくも無い。手術室とは縁の薄い学術教授だ。医学生相手の講義に明け暮れる毎日さ」

メスを持つことも無い、ただ医学生を前にマイクを持つての講義専門の教授を岡平登一郎は学術教授と自分を蔑あやむんでいた。

「それにしても週刊誌にリークしたのはだれだ？」

「そんなことはどうでも良い」

「たしかにな。益田とかいった准教授はどうなった？」

「俺の穴を埋めて今は教授に納っている」

岡平登一郎の今の処遇は週刊誌へのリークによる結果であることは明らかだった。リークの目的もさだかではない。益田准教授にしてもチームの一員であったことから処分も覚悟していたことと思う。しかし、不起訴となったことでそれを免れ、教授となっていた。

「どうだ、おれの所に来ないか。おれが理事長でおまえが院長って言うのはどうだ」

「よせよ。おれは外科が本流だ。おまえのところは内科が専門だろう」

「そう思うと思った。かといって教授のおまえが開

業医なんぞに納るわけがないな」

志賀先太一も本気で岡平登一郎を大岳病院へと誘っているわけではない。万が一にでもその気になれば何時でもいいとの思いだった。

「遅くなりました。今日はお声を掛けていただきありがとうございます」

睡蓮の間の襖が開き、雛菊と小染が入ってきた。

「まあいい。今夜は楽しく呑むことに専念するさ」

「そうですよ。小染姐さんと私とで精一杯務めさせていただきます」

「そうだな。久し振りに小染姐さんの三味線と小唄に合わせて雛菊姐さんが舞うのを見たいものだ」

睡蓮の間に小染がひく三味線の音が心地よく響いた。

久し振りの憩いの時間を大いに楽しんだ岡平登一郎と志賀先太一は女将が手配した二台のタクシーに別れて乗車し志崎庵を後にした。

「岡平先生、無粋な真似をしてもうしわけありません」

岡平登一郎の乗り込んだタクシーの助手席には男が一人座っていた。志崎庵が手配するタクシーは女将の目に適った選りすぐりの運転手がハンドルを握

ることを知っている岡平登一郎は、見習いの運転手だとばかり思っていた。

「……」

突然の語りかけに岡平登一郎は戸惑った。

「先生、芳元です。女将に事情を話してこのタクシーに乗せて貰いました。先生、私はジャーナリストです。私は先生と米沢章吾さんによって生かされました。しかし、私は本当に生きていいのだろうかと悩みました。先生は不起訴とはなりましたが世間ではグレーのままです。私は真実が知りたいのです。

先生……」

「芳元さん。芳元さんは何ら恥じること無くジャーナリストとしての人生を全うして下さい。私には不純な思いは何もありません。倫理的に問題があると言う人が多いことも承知しています。一步いっぽ先まきんじる臓器移植に疑念ダウトはつきものです。しかし医学界における常識の枠を超えることで蘇る命があることが証明されたのも事実です。これからは高齢のドナーの登場で、高齢のレシピエントが救われるでしょう。安楽死の議論が活発にもなるでしょう。わたしはこれで良いとおもっています。少し残念なのはその現場に私が立ち会えないことです」

「先生。私はこのことを小説にして世に出したいとおもっています。ノンフィクションにより近いフィクションにはなりますが。それが私の使命のような気がします」

「そうですね。頑張ってください」

タクシーが小田原駅の西口に着けられた。

岡平登一郎は芳元大輔に軽く頭を下げると駅舎の中へと消えていった。芳元大輔はその背中に深々と腰を折って見送った。

翌日からジャーナリストとしての芳元大輔は大岳病院に横たわる患者の取材に入った。

完